

木簡研究

第四号

木簡研究

第四号



木  
簡  
学  
会

題字 藤枝 見刻

# 目次

巻頭言——木簡保存法の思い出——坪井清足

一九八一年出土の木簡

## 概要

### 凡例

奈良・平城宮跡	清田善樹・今泉隆雄	東野治之	7	大阪・小曾根遺跡	柳本照男	41
奈良・奈良女子大学構内遺跡	清田善樹	7	愛知・尾張國府跡	北條献示	42	
奈良・法隆寺	清田善樹	22	愛知・下津城跡	北條献示	43	
奈良・藤原宮跡	加藤 優	24	静岡・板尻遺跡	吉岡 仲夫	45	
京都・長岡京跡	清水みき	25	静岡・小川城跡	原川 宏・山口和夫	47	
京都・長岡京跡	鈴木久男	26	長野・恒川遺跡	小林 正春	49	
京都・三条西殿跡	定 森秀夫	31	群馬・三ツ寺遺跡	女屋 和志雄	50	
京都・鳥羽離宮跡	上村和直	32	栃木・下野國府跡	大金宣亮・田熊清彦・木村 等	51	
大阪・若江遺跡	阿部 剛治	33	宮城・多賀城跡	佐 藤 則之	54	
大阪・佐堂遺跡	三宅正浩	35	宮城・郡山遺跡	木村浩二・平川 南	56	
大阪・大阪城三の丸(大手口)遺跡	藤井直正	37	岩手・胆沢城跡	佐久間 賢	59	
		38	山形・道伝遺跡	藤田 宥 宣	61	
			山形・笹原遺跡	手塚 孝	62	

山形・明成寺遺跡	佐藤庄一	64	広島・道照遺跡	福島政文	75
山形・安田遺跡	佐藤庄一	65	山口・長門国分寺跡	伊藤照雄	76
福井・大森鍾鳥遺跡	仁科章	66	和歌山・野田地区遺跡	渋谷高秀	78
石川・高堂遺跡	戸潤幹夫	67	和歌山・湯川神社境内遺跡	久貝健	79
石川・漆町遺跡(C地区)	小村茂	69	福岡・大宰府跡(大福地区)	倉住靖彦	81
石川・南吉田葛山遺跡	浜野伸雄	70	福岡・九州大学(筑紫地区)構内遺跡	倉住靖彦	82
岡山・百間川遺跡群(原尾島遺跡)	岡田博	71	福岡・長野遺跡	栗山伸司	83
広島・草戸千軒遺跡	志田原重人	73	福岡・辻田西遺跡	栗山伸司	85
一九七七年以前出土の木簡(四)					
奈良・平城宮跡(第二二次南)	鬼頭清明	87	奈良・平城宮跡(第二八次)	鬼頭清明	94
奈良・平城宮跡(第二七次)	鬼頭清明	94	奈良・平城宮跡(第二九次)	鬼頭清明	96
呪符木簡の系譜	和田翠	97			
木簡と上代文学——水産物付札をめぐる——	小谷博泰	137			
「漆紙文書」出土概要	佐藤宗諄	152			

## 凡 例

一、以下の原稿は各木簡出土地の調査機関に依頼して、執筆していただいたものであるが、体裁および釈文の記載形式については編集担当の責任において調整した。

一、原稿の配列はほぼ奈良時代の五畿七道の順序に準じた。

一、釈文下段のアラビア数字は木簡の長さ・幅・厚さを示す（単位はミリメートル）。欠損している場合は括弧つきで示した。その下の三桁の数字は型式番号を示す。またそれぞれの発掘機関での木簡の通し番号は最下段に示した。

一、釈文に加えた符号は次の通りである（五頁第一図参照）。

「**┌**」 木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す。

「**└**」 木簡の上端・下端に切り込みのあることを示す。

「**◻**」 抹消した字面のあきらかな場合に限り原字の左傍に付した。

「**■**」 抹消により判読困難なもの。

「**□□**」 欠損文字のうち字数の確認できるもの。

「**□**」 欠損文字のうち字数が推定できるもの。

「**□□**」 欠損文字のうち字数の数えられないもの。

× 前後に文字のつづくことが推定されるが、折損等により文字が失われているもの。

「**┌**」 異筆、追筆。

「**└**」 合点。

・ 木簡の表裏に文字のある場合、その区別を示す。

〔**┌**〕 校訂に関する注で、原則として釈文の右傍に付し、本文に置き換えるべき文字を含む場合。

カ 編者が加えた注で疑問の残るもの。

ママ 文字に疑問はないが意味の通じ難いもの。

…… 同一木簡と推定されるが折損等により直接つながらず、中間の文字が不明なもの。

|| 組版の関係で一行のものを二行以上に組まなければならなかった場合、行末・行初につけたもの。

一、地形図は原則として国土地理院発行の五万分の一地形図を使用し図名を（**○**）内に示した。地図中の**▼**は木簡の出土地点を示す。

一、釈文の最下段に三桁で示した型式番号は、木簡の形態を示し、つぎの一五型式からなる（六頁第二図参照）。

011型式 短冊型。

- 019型式 短冊型で、側面に孔を穿ったもの。
- 020型式 一端が方頭で他端は折損・腐蝕で原形が失われたもの。
- 021型式 小形矩形のもの。
- 022型式 小形矩形の材の一端を圭頭にしたもの。
- 023型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいれたもの。方頭・圭頭など種々の作り方がある。
- 024型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれたもの。
- 025型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。
- 026型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。
- 027型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。
- 028型式 長方形の材の一端を尖らせたものであるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。
- 029型式 用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。
- 030型式 用途未詳の木製品に墨書のあるもの。
- 031型式 折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの。
- 032型式 削屑。
- 広島・草戸千軒町遺跡及び道照遺跡出土木簡の型式番号は、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒―木簡―』を参照された。

以下財掠人安万呂  
行夜使仍注狀故移

×位下財掠人安万呂  
×行夜使仍注狀故移

泉進上材十二條中  
又八條×

武藏國男妾郡餘戸里大賢鼓一斗天平十八年十一月

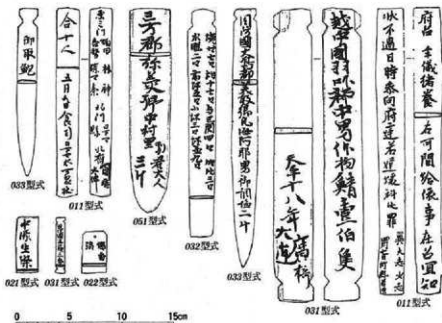
〔武藏國男妾郡餘戸里大賢鼓一斗天平十八年十一月〕

請飯部一人  
舍人十七人  
右依例所請如件

請飯部一人  
舍人十七人  
右依例所請如件

第1圖 木簡釈文の表現法





第2圖 木簡の形態分類

## 奈良・藤原宮跡

## 1 所在地 奈良県橿原市四分町

## 2 調査期間 一九八一年(昭56)五月〜一九八二年(昭57)三月

## 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

## 4 調査担当者 狩野 久

## 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡

## 6 遺跡の年代 七世紀末〜八世紀初頭

## 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一九八一年度は宮の西南隅地域調査(第三四次)において木簡が一点出土したのみである。当地域は宮の西面大垣と南面大垣の接続部を含む場所、面積一四六二㎡を調査した。藤原宮時代の遺構は西大垣の他、西面内濠と南面内濠の接続部、西面外濠・南面外濠等である。両外濠の接続部分は民家があり、調査区外である。

西面大垣は七間分一九m、南面大垣は六間分一六m検出し、柱間寸法は二・七m(九尺)である。内濠は、幅は一・八〜二・二m、深さ〇・七mで北流し、堆積層は上・中・下三層あり、上層からは多量の瓦が出土したが、中・下層は遺物が少ない。

外濠は、北面や東面においては腐蝕と共に埋没したが、西面・南面においては一〇世紀頃まで水路として機能しており、流量も多く、

後世の氾濫と浸蝕により著しく拡大・変形している。西面外濠は二七m分を検出したが、幅一〇mにまでなる箇所がある。当初の流路を残している部分から推測すれば、下底幅は五m程となる。南面外濠は二〇m分を検出し、溝幅は東端で六・二mあるが、溝下底では三mの当初の流路痕跡を残している。西半も二次的に溝幅が広がり、北岸は北西方向に斜行して西面外濠へ向う。深さは、南面外濠で一m、西面外濠の南端は一・三m、北端は一・六mであり、それぞれ西流し、北流する。西面外濠の堆積層は五層あり、底から灰色ガラス、灰色粘土Ⅱ、灰色砂、灰色粘土Ⅰ、灰色粘土Ⅰの順である。最下層の灰色ガラス層は広がった溝の全域にあり、藤原宮期から平安初期までの遺物を含み、木簡もこの層から出土した。最上層からは一〇世紀の遺物が出土している。南面外濠の堆積層もほぼ同様である。外濠からの他の出土遺物としては、土器・瓦の他、等身大人形、削り掛け、陽物形板状品、曲物、棹、隆平永宝、延喜通宝、獸骨、桃核等の自然遺物、弥生時代の土器、銅鏃等がある。

## 8 木簡の釈文・内容

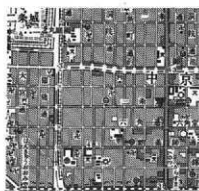
・ × □ □ □ □ □ □ □ □ □ □  
・ × 五□八月十九×

## 9 関係文献

奈良国立文化財研究所 『飛鳥・藤原宮跡調査概報12』

一九八二年  
(加藤 優)

さんじょうじどの  
京都・三条西殿跡



(京都東北部 2万5千分の1)

発掘地は、平安時代後期に藤原摂関家の邸宅であった三条西殿の東南角にあたる地点である。一九六九年に平安博物館が同所に二本のトレンチを入れていて、三条大路の北側側溝と烏丸小路の西側側溝と推定される溝が確認されていた。今回は、全面的に発掘を行い、主に中・近世の土壇・井戸・瓦涵などを多数検出したが、平安時代の遺構は極めて少なかった。

- 1 所在地 京都市中京区烏丸通姉小路下ル場之町
- 2 調査期間 一九八一年(昭56)二月・五月
- 3 発掘機関 平安博物館
- 4 調査担当者 下條信行・植山 茂・定森秀夫
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 平安時代と江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

三条大路側溝としては、平安時代後期と推定される素掘りの溝がある。さらに、その南側に室町時代後半と江戸初期と推定される石組溝二本が重複して検出された。下段の石組溝は、石組の内側でさらに一段掘り下げられていて、埋土は暗青灰色粘質土となっていた。巡礼札はこの粘質土から出土し、室町時代後半と推定される。この上にさらに石組の溝があり、これは江戸初期まで使用されたと推定される。

8 木簡の釈文・内容

巡礼札は三枚検出され、それぞれ上端を尖り気味にし、孔を有している(番号は実測図の番号と一致する。なお、釈文は当館の藤本孝一氏に御願いした)。

(1) 「西國卅三所願礼」

15.5 × 9.5 × 0.11

(2) 「西國卅三所願礼同行二人」

15.5 × 9.5 × 0.11

(3) 「西國卅三所願礼同行二人」

15.5 × 9.5 × 0.11

この種の巡礼札は伝世品として、岩手県中尊寺、栃木県養阿寺、滋賀県石山寺などに残っている。なお、当遺跡のすぐ近くに西國第十八番札所である六角堂(頂法寺)がある(地図参照)。

9 関係文献

白石太郎・伊藤文三・近藤喬一『平安京三条西殿跡

発掘調査報告』(平安博物館研究紀要)3、一九七一年

1981年出土の木簡



定森秀夫「因版解説・三条西殿跡出土の巡礼札」

〔古代文化〕33―12）

一九八一年  
（定森秀夫）

## 大阪・若江遺跡



(大阪東南部)

知られるようになった。

史上有名な若江城・若江寺が存在している所として著名である。遺跡は、一九三四年楠根川改修工事の際に多量の弥生土器、土師器、須恵器、瓦などが出土したことによって

- 1 所在地 大阪府東大阪市若江本町・北町・南町
- 2 調査期間 一九八〇年(昭55)十月～一九八一年(昭56)二月
- 3 発掘機関 東大阪市教育委員会・朝東大阪市文化財協会
- 4 調査担当者 阿部嗣治
- 5 遺跡の種類 城郭跡・寺院跡・集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代後期～安土・桃山時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

若江遺跡は、旧楠根川(現在の第二斎屋川)が形成した沖積平野上に位置する弥生時代後期から安土・桃山時代の複合遺跡で、標高約

五mである。古くから歴史上有名な若江城・若江

寺が存在している所として著名である。遺跡は、

一九三四年楠根川改修工事の際に多量の弥生土器、土師器、須恵器、瓦など

が出土したことによって

知られるようになった。

発掘調査は、一九七二年に若江小学校校舎増築に伴う調査を実施して以来、現在まで国庫補助事業・下水道管渠築造工事・府道四条と長堂線拡幅工事などに伴う調査をほぼ毎年実施し、その調査総面積は約六〇〇〇㎡に及んでいる。これらの調査により、若江城の堀・盛基壇・礎石・井戸・溝、あるいは中世集落に伴う井戸・溝・土壇・ピットなどの遺構を数多く検出しており、若江城・中世集落の様相は徐々に解明されつつある。

木簡は、一九八〇年の調査で検出した若江城の堀内より出土した。検出長約一〇〇m、検出幅約九m(推定幅約二m)、深さ約二mを掘り、二段掘りを行なっている。埋土・堆積土の状況から見て短時間に埋められたと思われる。遺物は、土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・瓦・木製品・金属製品などが多量に出土しており、最も新しい遺物は、一六世紀後半である。木簡はこれらの遺物に伴って堀の底にはり付いた状態で出土している。

このように現在まで検出した遺構・遺物は、若江城の規模・構造あるいは城内生活を探る上で貴重な資料であると言えよう。

### 8 木簡の釈文・内容

奉轉讀大般若経難信解品之初也

「正月三日」

1.8x0.6x0.33

木簡の右下半に墨書の痕跡が認められるが判読不可能である。しかしながら本木簡と同様の木簡が出土している広島県福山市草戸千



軒町遺跡の例を見ると同位置に年号の墨書があること、本木簡左下半に月・日の墨書があることから見れば、右下半には年号の記載があったと思われる。

9 関係文献

- 下村晴文 勝田邦夫 「若江寺跡・若江城跡 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報15」(東大阪市教育委員会) 一九七五年
- 勝田邦夫 新田 洋 「若江城跡」(若江城跡 北島池遺跡調査報告) 東大阪市遺跡保護調査会) 一九七五年
- 福水信雄 「公共下水道第16工区管渠築造工事に伴う若江遺跡の発掘調査」(調査会ニース) No.9 東大阪市遺跡保護調査会) 一九七七年
- 芋本隆裕 「若江遺跡」(鬼塚遺跡Ⅱ・若江遺跡発掘調査報告 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報19) 東大阪市遺跡保護調査会) 一九七九年
- 勝田邦夫 「若江遺跡」(關手遺跡・瓜生堂遺跡・若江遺跡・額田寺

跡 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報21) 東大阪市教育委員会) 一九八〇年

阿部嗣治 上野利明 勝田邦夫 「若江遺跡・山賀遺跡発掘調査概報」(東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集一九八〇年度) 東大阪市遺跡保護調査会) 一九八一年

阿部嗣治 「若江遺跡の現状と展望」(調査会ニース) No.20 東大阪市遺跡保護調査会) 一九八一年

下村晴文 上野利明 「半堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報23」(東大阪市教育委員会) 一九八二年

阿部嗣治 勝田邦夫 はか 「若江遺跡発掘調査報告書―遺構編」(東大阪市遺跡保護調査会) 一九八二年 (阿部嗣治)

## 木簡 研究 第二号

巻頭言——木簡と墨書土器——

平野 邦雄

一九七九年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京左京三条二坊宮跡庭園跡

藤原宮跡 藤原京条坊閘連遺構 長岡京跡 平安京左京

内膳町跡 国府遺跡 大阪城三の丸(京橋口)遺跡 木津

氏館跡 下津城跡 城山遺跡 新倉館跡 鴨遺跡 穴太

遺跡 服部遺跡 畑田院寺跡 下野国府跡 道伝遺跡

弘田權跡 草戸千軒町遺跡 尾道市街地遺跡 安芸国分

尼寺伝承地 久米窪田遺跡 金光寺跡

一九七七年以前出土の木簡(一)

平城宮跡(第一三次・第一六・一七次・第一八次・第二〇次)

周防鑄銭司跡

木簡と大宝令

岸 俊男

中国における雲夢秦簡研究の現状

永田 英正

柚井遺跡出土の木簡

榮原水達男

叢報

(残部僅少) 頒価 三五〇〇円 千四〇〇円

大阪・小曾根遺跡

- 1 所在地 大阪府豊中市北条一丁目一七九番地  
 2 調査期間 一九八一年(昭56)一〇月～二月

3 発掘機関 豊中市教育委員会

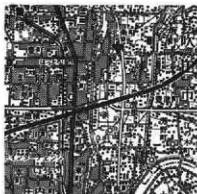
4 調査担当者 橋本正幸・柳本照男

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 弥生・鎌倉時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

小曾根遺跡は豊中市の東南部にあたり、かつては小曾根村と称され、北は千里丘陵、南及び東西は河川で区切られた沖積平野、標高



(大阪西北部)

約二・五m前後に立地する。

今回の調査は共同住宅建設に伴って実施したものである。検出した遺構は弥生時代前期の柱穴跡、同じく中期の方形周溝墓、平安時代後半から鎌倉時代にかけたの掘立柱建物

数棟、井戸、土壇、溝などで、弥生時代から中世にいたる複合遺跡である。

木簡を出土した土壇は平面が円形で、直径約六m、深さ約一・五mを測る大形で楕円状を呈している。出土した遺物は木簡類をはじめとする木製品その他、土器類、金属器、種子類などの多量の遺物が出土している。年代は今のところ大まかに十二世紀代と捉えておく。

8 木簡の釈文・内容

〔蘇民将来〕□□□□

(172)×24×6 039

(柳本照男)



## 愛知・尾張国府跡



(名古屋北部)

発掘調査は、一九七七年(昭52)度より毎年継続して実施しているが、直接政府跡と断定できる遺構は検出されていない。しかし、乾元大宝の入った細頸瓶、緑釉円塔、各種陶器など国府の所在地であった可能性を裏付け

- 1 所在地 愛知県稲沢市国府宮町・松下町
- 2 調査期間 一九八一年(昭56)五月～一九八二年(昭57)三月
- 3 発掘機関 稲沢市教育委員会
- 4 発掘担当者 岩野見司
- 5 遺跡の種類 官衙跡
- 6 遺跡の年代 奈良・平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 尾張国府跡は、木曾川の支流三宅川が大きく蛇行する右岸の自然堤防上に立地し、標高六～七mを数える。

る多種類の遺物が出土している。

一九八一年度の調査は、総社である尾張大國靈神社周辺の二か所で実施した。木簡を出土した稲沢市国府宮町大割では、横一条、井戸一基、溝三条、近世土壌墓二基などが検出され、須恵器、土師器、灰釉陶器(陰刻文長方鏡)、緑釉陶器、中国陶磁、中世陶器、土製品、石製品(石帯)、銅製品、鉄製品などが出土した。

木簡は、一二世紀に腐絶したと考えられる井戸(素掘り)より出土した。

### 8 木簡の釈文・内容

出土した木簡は一点で、両側面が欠損している。



一面は「の」、もう一面は「人」をそれぞれ連続して墨書したもののように見える。落書き留書の類であろう。

### 9 関係文献

稲沢市教育委員会

『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅳ』

(稲沢市文化財調査報告Ⅴ)

一九八二年  
(北條献示)

愛知・下津城跡



(名古屋北部)

1 所在地 愛知県稲沢市下津町高戸

2 調査期間 一九八一年(昭56)七月～一九八二年(昭57)三月

3 発掘機関 稲沢市教育委員会

4 調査担当者 岩野見司

5 遺跡の種類 城跡

6 遺跡の年代 鎌倉～室町時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

下津城跡は、尾張国府跡の東二・五kmに位置し、木曾川の支流青木川右岸の自然堤防上に立地する。城の起源は詳らかでないが、鎌倉時代から守護所があった可能性がある。確実なのは、斯波氏が守護に著任した応永七年(一四〇〇)頃以降で、守護代の織田氏が居城していた。

文明八年(一四七六)織田敏定によって城が焼かれ、城主織田敏広は国府宮へ

遷した。

一九七九年(昭54)度から三か年にわたって県道拡幅部分で発掘調査が実施され、城の南北方向での範囲が確認された。一九八一年度の調査は、六か所の発掘区を設け、推定本丸・二の丸境の堀、二の丸・三の丸境の堀、三の丸西端の堀、土器溜り、土壕群等が検出された。堀の肩には護岸用と考えられる杭列が残存していた。出土遺物は、木製品(木筒、漆器、曲物、櫛、篋)、瓦(軒平瓦)、土師器、中国陶磁、中世陶器、土製品、石製品、銅製品等である。

木筒は、二の丸・三の丸境の堀、三の丸西端の堀の二か所で出土した。

8 木筒の积文・内容

出土した木筒は一四点で、うち四点(1)～(4)は笹塔婆、七点(5)～(11)は箸状の村に墨書したものである。

(1) 「南無阿弥陀佛 為 妙珍」

頭部は斐頭状で左右に二本の切込がある。

(2) 「孤葉より葉 速得往生為常久

・ 叶

頭部は五輪塔状。

(3) ・ 孤葉より葉 為

・ 叶

5.5 × 5.5 × 0.8  
 4.8 × 4.8 × 0.8  
 (4.8) × 4.8 × 0.8

頭部は五輪塔状。

- (4) ×道□× (61)×20×2 061  
 (5) ▽□ (90)×21×4 032  
 (6) ▽□ (75)×(7)×2 039  
 (7) ■ (71)×22×2 019  
 (8) □… (249)×11×(3) 065  
 (9) ×□□ (281)×11×(3) 065  
 00 □□ (255)×10×(3) 065

01 □□ (282)×11×(3) 065

02 □□ (297)×11×(3) 065

03 □□ (276)×12×(4) 065

04 □□ (249)×9×6 065

9 関係文献

稲沢市教育委員会

『稲沢市の木製品』

『稲沢市文化財調査報告XIV』

一九八二年

稲沢市教育委員会

『下津城跡発掘調査概報報告書III』

『稲沢市文化財調査報告XVI』

一九八二年

(北條献示)



木筒(1)



木筒(2)



(磐田)

## 静岡・坂尻遺跡

- 1 所在地 静岡県袋井市国本
- 2 調査期間 一九八〇年(昭55)二月～一九八三年(昭58)
- 3 発掘機関 袋井市教育委員会
- 4 調査担当者 吉岡伸夫・永井義博・西井幸雄・松井一明ほか
- 5 遺跡の種類 官衙跡・集落跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代前期～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

坂尻遺跡は、静岡県袋井市と掛川市の境、南流する原野谷川の西岸に形成された自然堤防上に立地し、隣接して、南に旧東海道が東西に通っている。遺跡面積は、およそ六万㎡と推定される。

国道一号線バイパス建設に伴う事前踏査により、いくらかの土器片が採集されていたが、一九八〇年一月より行われた第一次調査(範囲確認調査)において、

奈良時代を中心とする多量の土器片と、古墳時代中期から近世にいたる溝状遺構、竪穴状遺構、柱穴列等、重複する多数の遺構の存在が確認された。また出土土器中に「日根□□」という佐野郡の郷名を記した墨書土器(杵、奈良時代)が含まれていたことから、遺跡の取扱いばかりでなく、その性格についてまでも論議されるようになった。袋井市教育委員会では、工事予定区域約八〇〇〇㎡について、全面発掘調査することとし、一九八二年三月現在、およそ四五〇〇㎡について調査を終了した。調査は継続中であるが、一九八一年度の調査では、古墳時代前期の環濠と考えられる三条の溝、古墳時代後期に位置づけられる多数の竪穴状遺構群、および奈良時代に編年される一五棟の掘立柱建物群、溝状遺構等を検出している。

### 8 木簡の积文・内容

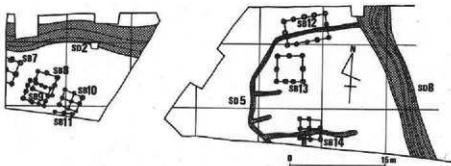


(80) × 20 × 3 82



(119) × 26 × 7 82

(1)はSD八と仮称した溝の最下層に堆積した砂質粘土中より出土したものである。SD八は、西岸に一条の枕杭と横木により段を設け、その上層に梁を張りつめた護岸施設を有していた。溝は灰色粘土層により蓋をされた状態であり、遺物は最下層に集中していた。文字の判読は困難であるが、第一字がくさかんむりであるとすれば、



坂尻遺跡（E～G区間）奈良時代遺構配置図

「若」とも読める。第二字の偏部は比較的明瞭であり、にんべんと思われる。或いは「倭」かもしれない。共存遺物に、多数の墨書土器、獣足付土器片、丸柄、馬形等がある。

(2)はSD二と仮称した溝の中層より出土したもので、下端を人為的に切断している。

文字は、第一字が、或いは「麻」かもしれない。共存する土器は奈良時代に編年される。貝塚が形成されており、「玉郷長」と墨書された杯底部片を伴出している。

他にSD一二と仮称した奈良時代の溝より、木削の削屑と考えられるものを一括採集しているが、現在、内容の判読、保存について検討中である。

る。

9 関係文献

・建設省・畿内局  
・奈良市教育委員会

「一般国道一号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書―坂尻遺跡第一次調査―」

同 「同―坂尻遺跡第二次調査―」

一九八一年  
一九八二年  
（吉岡伸夫）



木簡(1)  
(赤外線テレビ使用)

『但馬国分寺木簡』の刊行

但馬国分寺跡からは、一九七七年に寺域東南隅の外郭築地の内、外溝から三六点の木簡が出土している。すでに第三回木簡研究集会で報告されているが、昨年十二月兵庫県日高町教育委員会から、その正式報告書が刊行された。但馬国分寺木簡は、これまで国分寺跡出土の木簡として唯一の例である上、内容的に興味深いものを含み、ただに但馬国分寺研究のみならず、国分寺研究にとって貴重な史料となるものである。年代は神護景雲年間で、文書・荷札・習書などを含み、同時期の同寺の具体的な活動が知られるが、特に同寺の諸施設を記したものは同時期の造営状況を明らかにできる点で興味深い。これまで諸国国分寺の中で時期を限ってその造営の状況が知られる例はなく、八世紀後半における国分寺の成立の問題を考える上で大きな意義をもっている。報告書は、原文・図版をのせ、総説では前にのべた問題を論じている。さらに参考資料として、墨書土器と他遺跡出土の但馬国関係木簡の集成を付載する。

但馬国分寺跡発掘調査団編『但馬国分寺木簡』（A四版 本文

三三頁 コロタイプ図版一四葉）頒価二千円 送料四百円

△申込先√真隔社 〒六〇〇 京都市下京区油小路仏光寺上ル

振替口座 京都七七八二六七

## 長野・恒川遺跡

1 所在地 長野県飯田市匝光寺恒川

2 調査期間 一九八一年(昭56)二月〜一九八二年(昭57)三月

3 発掘機関 飯田市教育委員会

4 調査担当者 大沢和夫

5 遺跡の種類 集落跡・官衙跡

6 遺跡の年代 弥生〜歴史時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

恒川遺跡は、飯田市街から北東へ約5kmの天竜川河成段丘の低位段丘上に位置している。



(飯田)

発掘調査は、匝光寺地区を通過する国道一五三号線のバイパス建設に伴って行った。バイパス建設用地のうち約一〇〇〇㎡に弥生〜近世に至るまでの遺跡が連続しており、全体を恒川遺跡群として扱っている。このうち恒

川遺跡は、遺跡群の中心的な位置にある。

遺跡群は、弥生中期末以降の連続する集落跡であり、各期毎に相当量の遺構・遺物が検出されている。このうち、奈良〜平安時代にかけては、広範囲にわたり掘立柱建物群が確認された。

出土遺物には、和同開珎銀錢・金銅装鈔・簡脚鏡・円面鏡などがある。

木簡は、恒川遺跡のはば中央にある湧水により形成された湿地帯より、多量の土器類・木製品類とともに検出された。

8 木簡の釈文・内容

〔長□×

(211)×23×5 019

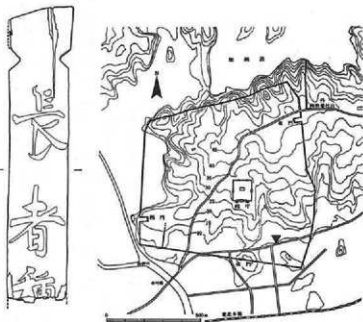
出土層位が確定できないが、伴出遺物からみて八世紀〜十二世紀にかけてのものである。

(小林正春)

## 宮城・多賀城跡

- 1 所在地 宮城県多賀城市市川・浮島
- 2 調査期間 一九八〇年(昭55)四月～六月
- 3 発掘機関 宮城県多賀城跡調査研究所
- 4 調査担当者 佐藤剛之ほか
- 5 遺跡の種類 国府跡
- 6 遺跡の年代 奈良～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要  
 多賀城跡は古代陸奥国府跡で、奈良時代には鎮守府も併置されていた遺跡である。遺跡は仙台平野の東北端に位置し、海拔二〇m～五〇m程の小丘陵上に立地しており、一部は海拔四m程の沖積地にも及んでいる。周囲には方約九〇〇mの範囲に築地が巡らされており、そのほぼ中央に政庁がある。  
 第三八次調査は政庁の東を刻む谷の出口にあたる作真地区南端の沖積地を対象として実施した。調査の結果、現在の地表下約三・五mで、区画施設の基礎地業とみられる遺構を検出した。  
 この遺構は杭材を敷き並べた東西に延びるいかだ地業と、その南側でこれと並行して延びる打ち込みの丸太列とからなる。  
 いかだ地業は、まずスタモ層上に杭材を東西に三列並べ、その上

にこれと直交させて同様の杭材を密に並べ、その中央部に面取りした材木を据えて盛土したものである。盛土には二時期あり、第一次盛土が崩壊して周囲に黒褐色粘土層が堆積した後、第二次盛土がなされている。



多賀城跡 木簡出土地点図



これらのいかだ地業と打ち込みの丸太列はこの地域一帯がスタコモ層が形成されるような軟弱地盤の低湿地であったため、区画施設構築の際に行なった基礎地業であろうと考えられる。

木簡は第一次盛土と第二次盛土に挟まれる自然堆積の黒褐色粘土層中より出土した。この層からは他に一端の左右に切り込みのある木筒様木札四点、曲物などの木製品、土師器、須恵器、瓦などが出土している。なお、この層は一〇世紀前半頃に降下したと思われる灰白色火山灰に覆われていること、層中にロクロ土師器杯が含まれていることなどから、ほぼ九世紀代に堆積したものと思われる。

8 木筒の釈文・内容

▽長者□<sub>〇</sub>×

(96) × (6) × 6 × 60

柱目板を素材としたもので、頭部は斜めに削られており、上端から約三・五cm下の左右に切り込みがある。横断面形は中央部がやや厚い凸レンズ状で、上端の一部と下端は欠損している。表面は風化が著しい。墨痕はほとんど残っておらず、文字部分のみがわずかに浮出している。文字は大きめの楷書で、切り込みの下から書き始め、文字の間隔はそれぞれ異なる。

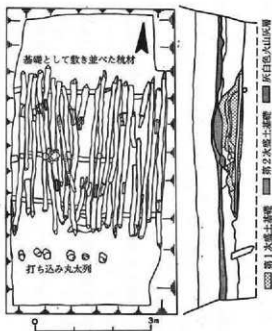
9 関係文献

名取県多賀城跡調査研究所

『宮城県多賀城跡調査研究所年報一九八一』

一九八二年

(佐藤剛之)



多賀城跡第38次発掘調査区遺構図



(北上)

胆沢城跡第三九次調査は内城の北東に位置する「北方官衙」東地区にあたる。官衙北方には城内を流れ東方の北上川に開口する九蔵川があり、今回の調査地区はこの九蔵川上流約三〇〇mの舟窪とよばれる旧氾濫原に面している。

検出した遺構は独立柱建物、柱列、井戸、溝、土塹などでA～D期の四期に大別でき、C期はC<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>期に細分される。A期は九世紀

## 岩手・胆沢城跡

いさわじょう

1 所在地 岩手県水沢市佐倉河字二月外

2 調査期間 一九八一年(昭56)七月～一〇月

3 発掘機関 水沢市教育委員会

4 調査担当者 伊藤博幸・佐久間賢(社会教育課)

5 遺跡の種類 官衙跡

6 遺跡の年代 九～一世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

前半の小規模な溝・土塹などで、漆紙文書(延暦三二・三三年具注簡断簡)を出したSD五九六、SD五七六、SK五五一などで調査区内の大半は空間となっている。B期になると建物造られ、調査区北西のSB五八一・SA六〇〇、南東のSB五六〇が現われる。C期は一〇世紀前半を上限とし、北側の東西棟建物SB五九〇を中心にSE五七三井戸をもつ建物で構成される。C<sub>1</sub>期にSB五九〇A、SB五八〇、C<sub>2</sub>期にSB五九〇B、D期にSB六〇四が属す。

C期のSE五七三井戸中層堆積土から木簡が一点出土した。井戸は深さ二・四mあり、幅〇・四m、長さ一・四m程の板を組み合せた井桁が四段まで遺存している。井桁内の層には水性堆積の非常に薄いシルト層が間層として数枚確認され自然堆積の状況を示した。井戸底に礫が数個みられた他は遺物の出土がほとんどない。遺物は底面にのる最下層から上の各層で、植物種子、加工材などの他、多量の須恵系土器が出土した。土師器、須恵器の伴出はきわめて少ない。各層の須恵系土器の様相に大きな変化は認められなく短期間の埋没と解される。ただ、焼成が還元状態に近いものが多くみられるとともに、外郭南門地区で判明した新しいグループに属す白付皿の出土を認めない等、須恵系土器のなかでも比較的古いグループと思われる。なお、遺存する井桁から上は人為的堆積で、層中に須恵系土器などの他、漆紙の付着する土師器杯がみられた。

8 木簡の釈文・内容

〔築カ〕  
 ・田郡白木郷中臣秋×

・進

(築)×10×6 038

SE五七三中層より須恵系土器と伴出した。四つの破片を接合したもので下端は欠損している。釈文は平川南氏の判読による。

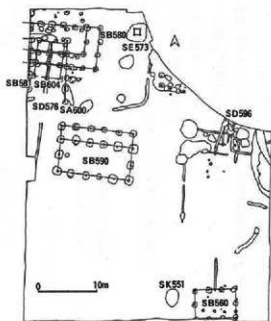
9 関係文献

水沢市教育委員会

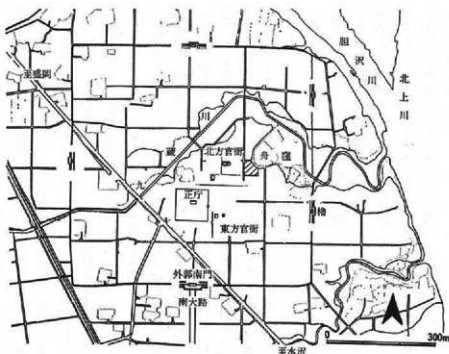
「胆沢城跡—昭和五十一年度発掘調査概報—」 一九七七年

同 「胆沢城跡—昭和五十六年度発掘調査概報—」 一九八二年

(佐久間賢)



胆沢城跡第39次発掘調査遺構配置図



胆沢城跡第39次発掘調査区(斜線部)

## 山形・明成寺遺跡

山形市



(酒田)

明成寺遺跡は、国指定史跡「城輪橋跡」の北方一・二kmに位置する。日向川・荒瀬川の合流地点より五〇〇m上流の荒瀬川左岸、旧氾濫原上に立地しており、標高一〇mを測る河間低地中の微高地である。発掘調査は、農林事業に係わる用排水路の部分に限定して行った。調査の結果、井戸跡一基、性格不明の落ち込みなどの遺構が検出されている。

1 所在地 山形県酒田市大字豊川字明成寺

2 調査期間 一九七九年(昭54)六月～七月

3 発掘機関 山形県教育委員会

4 調査担当者 川崎利夫・野尻 侃

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 平安～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

木簡は、発掘区の西北部SX二とした長径一一〇cm、短径六〇cm、深さ一五cmの不整形円形の落ち込みから三点重なった状態で検出されている。その他、この近くから同じ材質の残片が三点出土しているが、墨書は認められない。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「各以衣被盛果妙華供養他方十万億佛即」 (G6)×15×1 88

(2) 「以食時還到本飲食經行舍利弗極樂國」 (G5)×15×1 88

(3) 「主成就如是德殿」 (功張カ)〔庄張カ〕 (G7)×13×1 88

三点の木簡は、いずれも下端が欠損しているが、上部は山型に削つてある。釈文の内容は、「阿弥陀経」巻上の連続した三行にあたる。木簡の性格は、形題ともかね合せ、経文を墨書した楠経と考えられる。木簡の時期は、木簡および木製品以外の伴出遺物がないため明らかでない。

9 関係文献

山形県教育委員会『若王寺遺跡・明成寺遺跡・三田遺跡発掘調査報告書』

山形県埋蔵文化財報告書第32集 一九八〇年

長橋 至「酒田市明成寺遺跡出土埴塔婆もしくは神経」

(「庄内考古学」第17号)

一九八〇年  
(佐藤庄一)



(酒田)

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要  
 安田遺跡は、国指定史跡「城輪櫓跡」の南西一・五kmに位置し、標高八・九mの河間低地中の微高地に所在する。本遺跡は通称地藏寺部落内の東半分を含む広い範囲にまたがること

が予想されるが、発掘調査は農林事業に係わる地域に限定して行った。調査の結果、獨立柱建物跡四棟、土壇六個所などの遺構が検出されている。木簡は、発掘区の北西

## 山形・安田遺跡

1 所在地 山形県酒田市大字安田字芳岡

2 調査期間 一九八一年(昭56)六月～七月

3 発掘機関 山形県教育委員会

4 調査担当者 佐藤庄一・野尻侃

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 平安～室町時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

部の遺物包含層から二点検出しており、周囲にはとくに落ち込みのような遺構は認められなかった。

8 木簡の釈文・内容

木簡は、柿紙の断簡が二点検出されている。

(1) ×<sup>〔人〕</sup>聞是經典如說循行 (昭)×11×0.9 昭

スギ材。上・下端欠損。

(2) 「故世世得善知識其× (昭)×11×0.9 昭

スギ材。下端欠損。上端圭頭。

(1)は、「妙法蓮華經」卷第七、藥師品第三に、「後五百歲中若有人聞是經典如說循行」という行があり、その一部を示す。

(2)は、「妙法蓮華經」卷第八、陀羅尼品第二六に、「故世世得善知識其善知識能作佛事示教」という行があり、その一部を示す。

木簡の時期は、包含層中の出土であるため断定はできないが、伴出した珠洲系陶器などから鎌倉～室町時代頃に想定される。

9 関係文献

山形県教育委員会 『安田遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文

化財報告書第56集

一九八二年 (佐藤庄一)

## 石川・南吉田葛山遺跡

- 1 所在地 石川県羽咋郡押水町南吉田
- 2 調査期間 一九八一年(昭56)六月〜一〇月
- 3 発掘機関 石川県立埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 浜野伸雄・土上正男
- 5 遺跡の種類 不明
- 6 遺跡の年代 古墳時代前期・鎌倉〜室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

南吉田葛山遺跡は、能登でも有数の暴れ川である相見・宝速の両河川により形成された沖積地に所在する。当遺跡は、建設省による



(石動)



押水バイパス建設に先立ち実施した試掘調査によって発見されたものである。現状が水田地帯であったことから、調査にあたっては調査区全体を既設の農道・排水路により第一〜第四の調査区に分割して発掘した。遺跡の立地点が沖積地のはば中央部であることから、遺構面までは深い所で2mにも及んだ。また、この堆積した土層の観察からは度重なる河川氾濫の痕跡を確認することができ、掘取した木製塔婆もこの氾濫により流入堆積したと考えられる土層から出土したものである。同一土層からは他に、漆器柄や磨滅した土師質土器片も出土しているが時期を明確にしうる程のものではない。また、地点を異にするが、同一レベルの流入堆積土層からは雁又式の鉄鎌も出土している。

当遺跡で検出した遺構は古墳時代の溝状遺構が主で、他に若干の

ピットが存在する。溝状遺構はその切り合い関係により、少なくとも三時期にわたり形成されたものと推定している。

第一調査区からは大溝を含む十二条の溝状遺構を検出した。遺構からは杭をはじめ曲物の底板・板状木簡・土器片等が出土している。特に、一号溝と七号溝（大溝）が近接する付近一帯には多量の杭や木材が集積しており、大溝からの取水施設の存在が考えられる。また、第四調査区で検出した十三号溝は、覆土層が単一であることから、溝上面から勾玉・横瓶・甕等が一括出土していることなどから、当溝を廃棄する際に、溝埋めの祭祀が行なわれたことが窺えるものがある。

以上のように、検出した遺構・遺物からはいまだ南吉田葛山遺跡の性格について多くは語れない。しかし、今後の整理作業を通して検討を重ねてゆきたいと考えている。

8 木簡の釈文・内容

「南无阿弥陀佛」

(110) × 2 × 5 ㎜

(新野伸雄)

訂正とお詫び

『木簡研究』第三号の「一九八〇年出土の木簡 石川・白山橋遺跡」に掲載しました四五頁の図版の説明「白山橋遺跡 一号土壟」は「板町遺跡 一号土壟」の誤りでした。ここに訂正するとともに執筆者・読者各位に深くお詫び致します。

岡山・百間川遺跡群 (原尾島遺跡)

1 所在地 岡山県岡山市原尾島

2 調査期間 一九七九年(昭54)四月～一九八一年(昭56)四月

3 発掘機関 岡山県教育委員会

4 調査担当者 岡田 博・島崎 東

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 縄文時代晩期～室町時代

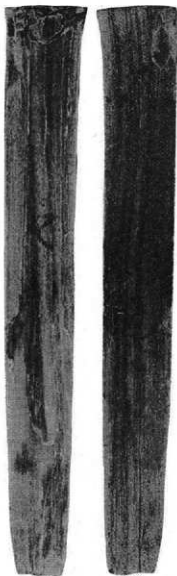
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は旭川放水路(百間川)改修計画に伴う事前発掘調査が行われている、百間川遺跡群に存在する。この遺跡群中、もっとも上流に位置する通称第一・第二高地・原尾島遺跡では、弥生時代前期から古墳時代にかけての数多くの遺構が検出されている。これらに伴う出土遺物も土器・木製品・金属器・玉類・鏡など質量共に豊富である。遺構の中では、と



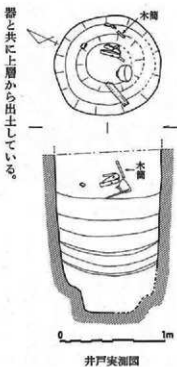
(岡山北部)

りわけ弥生時代後期に比定される水田址の調査が注目され、現在までに微高地上及びその縁辺で広大な面積の調査を実施している。特に、微高地縁辺で検出された灌漑用の溝や微高地上の集落との関係は明瞭かつ密接に看取される。この第一微高地は、海拔約三mの微高地部分と約二・五m前後の低位部とに地勢が異なっているが、現地表ではその高低を観察することはできない。後世の水田経営による地下げのため、微高地上の遺構の一部は消滅しているが、第一微高地の一部では、旧河道をはさむ中世の集落址の一画が検出された。木簡の出土した遺構は、河津東岸の数棟の掘立柱建物・欄列などから成る集落址の東方に隣接して検出された井戸である。平面形は円形を呈し、井戸枠・井筒等の構造物をもたない素掘りの井戸で、径一m・深さ一・六mを測る。木簡は立位の状態で、足駄・漆塗椀・板などの木製品や、備前鏡・青磁碗片(雷文帯連弁文画)などの陶磁



(裏)

(表)




井戸実測図

器と共に上層から出土している。

8 木簡の釈文・内容

・「品々 鬼急」

・「 急」

幾何学的文様から、呪符と考えられる。「急々如律令」の全文が省略され「急」一字のみ観察できる。共伴出土した青磁碗や備前鏡から十四世紀前半に比定される。

なお、本木簡の釈読にあたっては、草戸千軒町遺跡調査研究所 松下正司所長をはじめ志田原重人・篠原芳秀の各氏のご指導、ご教示を得た。記して深甚の謝意を表する次第である。

(岡田 博)



『草戸千軒—木簡—』の刊行

広島県福山市の芦田川の中洲に所在する中世集落・草戸千軒町遺跡からは、一九六九年の第五次調査以来これまで約四千点の木簡が出土している。これらの木簡は同遺跡の解明はもとより、中世の商業史や信仰・習俗を明らかにする具体的な資料である上に、なによりも古代木簡に対する中世木簡の特質を考えるまとまった資料として貴重である。この木簡の正式報告書が本年三月広島県草戸千軒町遺跡調査研究所から刊行された。報告書は第五次調査から一九七八年第二六次調査までに出土した三千八百点余のうち断片・削屑を除く二六三点を取載する。総説では遺跡の概要、木簡の出土運搬などとともに、第二回木簡学会で報告された中世木簡の形態と記載内容の特質について論じている。

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編

『草戸千軒町遺跡研究資料—草戸千軒—木簡—』

(A四版 本文六〇頁 図版六〇葉) 頒価四千元(送料込)

△申込先▽福山市花園町一ノ五ノ二 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所内 広島考古学研究会(振替口座 広島九一六九三)

和歌山・湯川<sup>ゆかわ</sup>神社境内遺跡



(御坊)

- 1 所在地 和歌山県御坊市湯川町小松原四三一一
  - 2 調査期間 一九八一年(昭五)七月～九月
  - 3 発掘機関 御坊市遺跡調査会
  - 4 調査担当者 巽 三郎・久貝 健
  - 5 遺跡の種類 居館跡
  - 6 遺跡の年代 鎌倉～戦国時代
  - 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
- 本遺跡は、標高六mの微高地に築かれた館跡で、歌地の周囲をめぐる幅約七～一mの堀を含めて東西約一三〇m、南北一八〇mの規模を有する。室町時代に有田・日高・牟婁郡一帯に勢力を有し、天正一三年(一五八五年)豊臣秀吉の南征軍によって滅ぼされた豪族湯川氏が構えた館である。現在湯川神社が祀られている館の南東隅で堀跡の一部が残存

しているのみで、その大部分は学校校庭となっている。

今回、御坊商工高等学校の校舎改築に伴い館の南西隅約五〇〇㎡の範囲を発掘調査し、館をめぐる西・南側の堀跡や池跡敷石などを検出した。また遺物として瓦、土師器小皿、瓦器碗、中国製青磁・染付、銅銭二点、鉄釘二点、根来塗り漆器碗二点（台底に「上」の朱字有）、木簡一点、箸二点などが出土した。

#### 8 木簡の釈文・内容

×吉田上□□分

(長)×(幅)×(厚)  
20.0×1.2×0.3

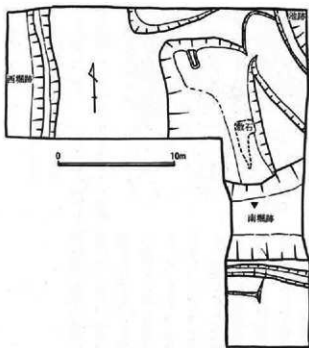
南堀内から検出したこの木簡は館の北方に位置する御坊市湯川町吉田の地より、もたらされた貢納物に付けられていた荷札と考えられる。

#### 9 関係文献

御坊市遺跡調査会 『湯川氏館跡発掘調査現地説明会資料』

一九八二年

(久貝 健)



湯川神社境内遺跡（湯川氏館跡）遺構配置図

## 福岡・長野遺跡

- 1 所在地 福岡県北九州市小倉南区長野
- 2 調査期間 一九七九年(昭四)五月
- 3 発掘機関 北九州市教育文化事業団
- 4 調査担当者 小方泰宏・木太久守・佐藤浩司・柴尾俊介・山口信義
- 5 遺跡の種類 集落跡・古代官衙跡?・中世豪族居館跡?
- 6 遺跡の年代 古墳時代?鎌倉・室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(小倉・行橋)

長野遺跡は、周防灘に面した曾根平野のやや奥まった低丘陵上1帯に展開している。九州縦貫道小倉東インター工事に伴って調査が今も実施されている。

調査は、標高一〇m、二〇mの低丘陵から竹馬川に向かって枝状に張り出した支丘陵部を中心に実施している。それぞれの

支丘陵上から、古墳時代の堅穴住居跡が検出され、これまでに総数七〇棟以上が確認されている。須恵器・土師器の他、鉄製農具の出土も多い。なお谷間からは水田跡も検出されている。奈良時代の遺構は少なく、敷基の土壇と柱穴が検出されるにすぎないが、包含層から出土した須恵器碗の底部に「金敷一」「大」等を墨書したものがあつた。平安時代には、堅穴住居跡、独立柱建物跡の他、支丘陵を断ち切る様な巾一〇m、深さ二mの大溝(空堀)があり、これに連続する支丘陵間の谷間を埋めて土塁を作る。大溝と土塁を合せて全長一二〇m以上に通している。この時代の瓦敷点、緑釉、すざり、銅製の帯金具等が出土している。以上の点から、普通の集落とは異なり、特殊な性格をもつた遺跡ではないかと考えられている。

木簡は、丘陵西側の試掘調査トレンチの上げ土の内から採集したものである。出土地点は支丘陵先端部の低湿地にあたる。この地点は長野E遺跡Ⅱ区として調査を実施した。その結果では、青灰色粘土が厚く堆積した低湿地で、かつては芦原であつたと思われる。上層から木杭、溝?等が検出された他、土師器、磁器の細片が出土したが時代の詳細は不明である。木簡は、この上層からの出土であると考えられるが、正確な出土層位は確認できなかった。下層からは、古墳時代の木製動・完形に近い土器等が出土している。

## 8 木簡の釈文・内容

× やかし米

(36) × 23 × 3 028

上部は欠損。材質未確認。ひらがなと漢字とでは、運筆、筆圧等が異なる様に思える。

## 9 関係文献

北九州市教育文化事業  
国庫蔵文化財調査室

「発掘ニュース十五号」

同 右 「発掘ニュース二十号」

一九八一年  
一九八二年  
(小方泰宏)



福岡・辻田西遺跡

- 1 所在地 福岡県北九州市八幡西区馬場山
- 2 調査期間 一九七九年(昭54)七月～一九八〇年(昭55)一月  
二月
- 3 発掘機関 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 4 調査担当者 梅崎恵司・宇野慎敏・佐藤浩司・山手誠治・栗山伸司
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生・鎌倉・室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要  
辻田西遺跡は、弥生時代墓地群である馬場山遺跡の南約一五〇mの、馬場山丘陵と隣接する微高地上に位置する。一九七六年(昭51)に北九州直方道路建設に先だって調査が行われた辻田遺跡と接し、遺跡の性格からして一連のものと思われる。  
調査は、旧産炭地としての後遺症から農地の地盤沈下が著しく、地上げと農地改良を兼ねた事業に伴って実施された。  
遺跡は、弥生時代の竪穴住居跡を主とする柱穴群が多数を占め、竪穴住居跡二六基、掘立柱建物跡二〇棟、溝六条、土壇一一基、貯蔵用竪穴一基、井戸一基が検出された中で、大半が弥生時代の所産



(直方・行橋)

などがあり、銅銭には開元通宝から紹定通宝まで一七枚出土している。土器は土師器の杯、皿類が大半であるが、一部陶磁器もある。この泥炭層は出土土器から鎌倉時代後半頃であることが判り、同層から出土した銅銭の中で最も新しい紹定通宝が一三世紀前半の鋳造であることから、比較的幅の狭い時期の遺物が大半を占めるものと思われる。

である。

また、馬場山丘陵に近い谷部では広範な泥炭地を形成しており、中から多数の木簡、漆器、土師器、銅銭に二点の木簡が出土している。木簡には下駄、杓子、曲物の底板、蓋、樋の子、碇、鞍、机



木簡(2)



木簡(1)

8 木簡の釈文・内容

(1) 「靱四斗御□中

(302) × 18 × 8 0.11

(2) 「御倉靱四斗三郎太郎□□」

282 × 19 × 5 0.11

(1)は下端に焼痕があり、わずかに欠損している。二点ともに泥炭層からの出土であり、鎌倉時代後半に比定される。釈文中の靱四斗の表現から一俵の米俵を意味したのと思われる。

9 関係文献

北九州市教育文化事業団

『辻田西遺跡』(北九州市埋蔵文化財

調査報告第十三集)

一九八二年

(梁山伸司)

### 木簡研究 第三号

巻頭言——中国簡牘呼称についての提言——

大庭 備

一九八〇年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京左京(外京)五条五坊七坪 藤原宮

跡 神田遺跡——下ッ葺—— 長岡京跡 大藏司遺跡 西沖遺跡

御殿・二之宮遺跡 野路岡田遺跡 多賀城跡 漆町西遺跡 板

町遺跡 白山橋遺跡 御館遺跡 御着城跡 簡・城山遺跡 草戸

千軒町遺跡 野田地区遺跡 観世音寺僧房跡 大宰府学校院跡東

辺部

一九七七年以前出土の木簡 (白)

平城宮跡(第二一次・第二二次北) 薬師寺 下岡田遺跡

中国における簡牘研究の位相 池田 温

糯米付札について 狩野 久

静岡県城山遺跡出土の具注曆木簡について 原 秀三郎

草戸千軒町遺跡出土の木簡——形態を中心に—— 志田原重人

巻報

頒価 三五〇〇円 千四〇〇円

## 木簡学会会則

第一条 本会は木簡学会と稱する。

第二条 本会の事務所は奈良県内に置く。

第三条 本会は木簡に関する情報を蒐集・整理し、木簡そのものについての研究・保存を推進するとともに、その成果の普及をはかり、史料としての活用を資することを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するため、つぎの事業を行なう。

- 1 木簡に関する情報の蒐集および整理
  - 2 研究会会の開催
  - 3 会誌「木簡研究」その他の刊行
  - 4 発掘調査組織、その他関連する学会・機関との連絡および協力
  - 5 その他前条の目的を達成するために必要な事業
- 第五条 木簡の調査・研究に従事し、本会の趣旨に賛同する者は会員になることができる。

二 本会に入会しようとするものは、会員二名の推薦を必要とし、委員会の承認を得なければならない。

三 会員は所定の会費を納入しなければならない。会費の額は総会において決定する。

四 会員は総会における議決権を有し、会誌の配布をうけ、そ

の他前条の事業に参加することができる。

五 会員に本会の目的の遂行をさまたげる行為のあった場合には、委員会はこれを除名することができる。

第六条 本会は次の役員をおく。

- 1 会長一名
- 2 副会長二名
- 3 委員若干名
- 4 監事二名

第七条 委員・監事は総会において選出され、任期は二年とする。ただし、再任はさまたげない。

二 委員は委員会を組織し、会則にもつき会務を処理する。

三 会長および副会長は、委員会の互選による。会長は本会を代表し、会務を統括する。副会長は会長を補佐する。

四 監事は会計および会務の執行を監査する。

第八条 本会は毎年一回総会を開く。

第九条 本会の経費は会費および寄付金をもってあて、総会において会計報告を行なうものとする。

第十条 この会則の変更は総会において議決するものとする。

第十一条 委員会は会務運営のため、幹事若干名を委嘱し、また細則を定めることができる。



## 彙報

### 木簡学会第三回総会および研究会

第三回木簡学会総会と研究会は例年どおり、十二月の第一土曜日、日曜日にかけて行なわれた。場所は、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館の講堂を使用した。参加会員は一〇〇名近く、総会・研究会とも充実した討議が行なわれた。研究会は第一日三名、第二日四名の報告を行ない、それをめぐって討論が行なわれたが、栃木・石川等の地方の木簡や中国簡の書風の問題なども含めて幅広い内容の研究会となった。さらに、当日は会場に下野国府跡や、石川鼻高堂遺跡などの木簡が遠方から運び込まれ、参加者は木簡を目的あたりにして検討を進めることができ、研究会の内容を一段と深めることができた。いつもながら、各発掘担当者・機関等の御好意に厚く感謝したい。

◇十二月二日（土）午後一時五分から第三回総会が始められた。

### 第三回総会（議長 北村文治氏）

岸俊男会長の挨拶のあと、北村文治氏を議長に選出して、総会議事を進めた。

### 会務・編集報告（佐藤委員）

本学会の一年間の会務活動と会誌編集について、次のような報

告があり、異議なく了承された。会務報告は、まず会員数が順調に増加していることを述べ、昨年度大会時にくらべて新入会員が一二名となり、総会の時点で一五四名になったことが報告された。編集については、会誌第三号を一〇〇部印刷したこと、また第二号を二五〇部増刷したこと、また一九八〇年、八一年の出土木簡については、各地の諸機関の御協力によって情報を十分に収集しえたことなどが報告され、さらに会誌の充実のためには会員からの積極的な投稿が望ましい旨報告があり、投稿規定を決めることとなった。

### 会計報告（岩本委員）

一九八〇年度（一九八〇年四月～八一年三月）の会計について、収支決算の報告と説明とが行なわれた。また八〇年度会計については、八一年六月五日に監事の関見氏・土田直鎮氏によって監査が行なわれ、帳簿類は誤りなく整理され、会計執行が正当に行なわれた旨、土田氏より報告が行なわれ、異議なく承認された。

総会の後、二時半より研究会が開催された。

### 研究会（議長 青木和夫氏）

#### 居延の草書簡

藤枝 晃

#### 呪符木簡の系譜

和田 萃

#### 庫未付札について

狩野 久

藤枝報告は永年にわたる氏による木簡の調査・研究を通しての

内容で、漢簡では数少ない草書木簡の機能的な特質を解明したもので、日本簡の即物的な研究には示唆するところの大きなものがあった。和田報告については『木簡研究』第四号(未号)に収載することができた。また狩野報告はすでに第三号に収載されており、参加者は会誌を参照しつつ報告をきくことができた。

◇十二月三日(日)

研究会(議長 原 秀三郎氏)

前日にひきつづいて、研究会が行なわれた。報告は次の四本であった。

最近の各地遺跡出土の木簡

泉頭清明

石川県小松市高堂遺跡出土の木簡について

戸潤幹夫

下野国府出土の木簡について

田熊清彦・平川 南

一九八一年の平城宮跡出土木簡

佐藤 信

この四つの報告はいずれも本号に内容の一部を収載している。また、昼食時の休憩時間を利用して、平城宮跡内の発掘現場(第一三三次)を見学した。発掘地点は宮南面西門付近で、木簡が出した二条大路北側溝等をみる事ができた。

委員会報告

◇一九八二年六月一七日

第四回木簡学会総会・研究会の日程・報告内容について検討

し、『木簡研究』第四号の編集方針の概要を決めた。また、新規入会申し込み者については四名の方々の申し込みを受理して、入会を承認した。なお、一九八一年度の会計報告があり、検討され、大会までに監査をうけることとした。

◇一九八二年十月三十日

第四回木簡学会の総会・研究会の内容・日時をほぼ確定した。また、『木簡研究』第四号の編集経過が報告され、ほぼ、額価据え置きで刊行できる見通しであることが指摘された。さらに新規入会者としては二名の申し込みがあり、承認された。また、今年度は委員の改選時期に当るため、大会に提出すべき役員候補について若干討議がなされた。

木簡学会 役員

会長	岸 俊男
副会長	大庭 脩 平野 邦雄
委員	青木 和夫 岩本 次郎 岡崎 敬
	門脇 禎二 狩野 久 鬼頭 清明
	佐藤 宗諱 田中 琢 田中 稔
	坪井 清足 直木孝次郎 早川 庄八
原 秀三郎	
監事	関 晃 土田 直鎮

PROCEEDINGS OF JAPANESE SOCIETY  
FOR THE STUDY  
OF WOODEN DOCUMENTS

NO. 4 1982

CONTENTS

Foreword .....	Kiyotari Tsuboi .....	i
Wooden Documents Excavated in 1981 .....		1
Outline		
Explanatory Notes		
Nara Palace Site, Nara Prefecture; Remains in Nara Women's University, Nara Prefecture; Remains of Hōryūji Temple, Nara Prefecture; Fujiwara Palace Site, Nara Prefecture; Site of Nagaoka Capital, Kyōto Prefecture; Remains of Sanjō-nishi-dono, Kyōto Prefecture; Remains of Toba-rikyū, Kyōto Prefecture; Remains of Wakae, Ōsaka Prefecture; Remains of Sadō, Ōsaka Prefecture; Remains of San-no-maru of Ōsaka Castle Site, Ōsaka Prefecture; Remains of Ozone, Ōsaka Prefecture; Site of Owari-Kokufu, Aichi Prefecture; Remains of Orizu Castle Site, Aichi Prefecture; Remains of Saka-jiri, Shizuoka Prefecture; Remains of Kogawa Castle Site, Shizuoka Prefecture; Remains of Gongga, Nagano Prefecture; Remains of Mitsudera II, Gunma Prefecture; Site of Shimotsuke-Kokufu, Tochigi Prefecture; Remains of Tagajō Castle, Miyagi Prefecture; Remains of Kōriyama, Miyagi Prefecture; Remains of Isawa Castle, Iwate Prefecture; Remains of Dōden, Yamagata Prefecture; Remains of Sasahara, Yamagata Prefecture; Remains of		

Myōjōji, Yamagata Prefecture; Remains of Yasuda, Yamagata Prefecture; Remains of Ōmori-Kaneshima, Fukui Prefecture; Remains of Takandō, Ishikawa Prefecture; Remains of Urushimachi, Ishikawa Prefecture; Remains of Minamiyoshida-Kuzuyama, Ishikawa Prefecture; Remains of Hyakkengawa, Okayama Prefecture; Remains of Kusado-Sengen-Chō, Hiroshima Prefecture; Remains of Dōshō, Hiroshima Prefecture; Remains of Nagato-Kokubunji Temple, Yamaguchi Prefecture; Remains of Noda-Chiku, Wakayama Prefecture; Remains in Yukawa-Jinja Shrine, Wakayama Prefecture; Remains of Dazaifu Site, Fukuoka Prefecture; Remains in Tsukushi Area of Kyūshū University, Fukuoka Prefecture; Remains of Nagano, Fukuoka Prefecture; Remains of Tsujita-nishi, Fukuoka Prefecture.	
Wooden Documents Excavated before 1977 (4) .....	87
Nara Palace Site (South Area of 22nd, 27th, 28th and 29th Excavation), Nara Prefecture.	
Genealogy of Wooden Documents for Charms.....	Atsumu Wada ..... 97
Wooden Documents and Ancient Literature	
—Tax Tallies for Aquatic Products— .....	Hiroyasu Kotani ..... 137
Outline of Excavated "Urushi-Gami" (Paper Permeated with Japan)	
Documents .....	Sōjun Satō..... 152
Collection of Reports	

*Published by*

JAPANESE SOCIETY

FOR THE STUDY OF WOODEN DOCUMENTS

一九八二年十一月二十日 印刷  
一九八二年十一月二十五日 発行

630 奈良市二条町二丁目九番一号  
奈良国立文化財研究所

編集発行

木

簡 学

会

会長 岸 俊男

TEL (0296) 3413931  
振替口座 京都 一五二七

京都市下京区油小路仏光寺上ル

印刷

眞

隔

社

TEL (0296) 35116034

